町民参加の町史づくり

竹富町史だより

2006・9・30
第28号

竹富町役場

沖縄県石垣市美崎町１１番地
TEL（０９８０）８２－６１９１

目次

『竹富町史』第十巻資料編「近代3～新城村頭の日誌」発刊 …… 1
第21回竹富町史編集委員会 …… 2
《写真にみるわが町》26
新城島民の南風見移住 …… 3
《記念碑たずねて》6
祖平宇根之碑 …… 4
《聖地めぐり》24
清明御嶽 …… 5
《史料紹介》
『官報』掲載八重山関係資料② …… 6
収蔵図書紹介 …… 16
業務日誌 …… 17
『竹富町史』既刊図書 …… 20
編集後記 …… 23

●表紙の写真●

竹富島のンブフル丘から眺望した1955年（昭和30）頃の風景である。同島は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されているが、今では姿を消した茅葺き屋根の民家のほか、赤瓦屋根の家屋があり、現在につながっている。当時は、竹富中学校が玻座間集落の東屋敷の東はずれにあったが、遠くに見える屋根の長い赤瓦屋根の建物がそれである。その後、学校は現在の場所に移転し、竹富小学校と一体化し、小中学校併置校になった。さらに遠方には石垣島の山並みがうっすらと影を落としている。

☆題字　大　城　正　明

『竹富町史』第十巻資料編「近代3～新城村頭の日誌」発刊

―竹富事務所所蔵の「村日記」等を収録―

近世八重山の三間切時代に頭職を輩出した宮良殿内の近代文書のひとつ、宮良當整が書き残した明治中期の日誌を収録した『竹富町史』第十巻資料編「近代3―新城村頭の日誌」を、本年三月末日に発刊しました。

発刊した「近代3」

本巻は平成十六年度に発刊した「近代1―竹富島喜宝院蒐集館文書」に次ぐ近代史料集で、「明治三十三年　日誌　宮良記」、「自明治三十四年丑年旧正月　至仝十二月　日誌　宮良當整」の二点を収録しています。

両文書はいずれも、宮良殿内の直系である士族の宮良當整が新城村頭の時代に記した日誌体の史料です。史料から當整がみた明治三十年代の新城村の島びとの暮らし、生業などを窺い知ることができます。

近世期の八重山は行政上において石垣・大浜・宮良の三間切に分けられ、それぞれ頭職を置き、合議によって在番と歩調を合わせ、政務が行われていました。宮良殿内は、代々八重山の頭職を勤めた宮良家に対する尊称で、由緒ある家柄で知られます。

同家には多種多様の史料類が残っており、それはほとんど明和の大津波（一七七一年）以降の文書です。文書の魅力は、首里王府の八重山支配の様子を知る史料が数多くあるということです。それらの史料はさまざまな規模帳、公事帳、職務帳の類などです。

本巻に収録した史料を書き残した宮良當整は、松茂姓一門の第三世・宮良當永を始祖とする一人で、九代十一世に当たり父・當宗、母・嘉善姓の女性の間の長男として出生しています。

行政官としては白保村与人（明治二五年～二九年）、新城村村頭（明治三〇年～三六）、竹富村村頭（明治三七年～四〇年）を歴任。三間切が廃止され、八重山村が誕生したときには村議になっています。

本巻収録の史料は、當整が新城村頭の要職にあった時に、公務上および私的生活で起きた出来事を書き記した日誌です。明治三十三年の日誌は原勝負、崎枝牧場修繕、布晒屋・舟屋の跡地処理、煙草・麦・米の生産状況、明治三十四年の日誌には新城村事務所や新城分校に植樹したことや、島の各字に竹類を植えたことなどが記されています。

第21回竹富町史編集委員会

―「島じま編」等を審議し承認―

竹富町史編集委員会（登野原武委員長）の第二十一回町史編集委員会が一月二十一日、旧竹教委・農業委・町史編集室合同会議室で開かれ、今後編集・発刊すべき資料編・島じま編などについて審議を重ねました。

議題は①町史第十巻資料編「近代3―新城村頭の日誌」の編集状況、②町史第十巻資料編「近代4―官報にみる八重山」の発刊、③「島じま編」（第二巻～第八巻）の編集、④町史第十一巻資料編「新聞集成Ⅶ」の編集、⑤今後の町史編集・発刊の五件が提案され、全て承認されました。

委員会の席上、登野原委員長が「島じま編を各島ごとの専門部会が中心になり取り組んでいることに対し、力強く感じているところであります。厳しい財政状況といわれますが、編集計画どおりに完結するように、今後の取り組みをお願いします」とあいさつをし、各委員に協力を求めました。

議案は、①町史第十巻資料編「近代3―新城村頭の日誌」は、宮良殿内文書のひとつである、宮良當整が書き残した明治三十三年・三十四年の日誌を史料として用いて収録するもので、平成十七年度に発刊することを確認、承認しました。三月末日に刊行されました。

本巻は八重山島庁と村落、新城島の人々の暮らし、宮良殿内の家系などを総説として記し、本編は上段に翻刻文、中段に意訳文、下段に語注を配する三段組の編集構成をとり、町民が気軽に親しめるように編集に工夫を凝らしています。

②町史第十巻資料編「近代4―官報にみる八重山」は、一八八三年（明治一六）から一九四五年（昭和二〇）までの発行された『官報』の中から、八重山関係の記事を探索して編集し、発刊するものです。現在、先に探索した記事のパソコンへの文字入力を行っています。

③島じま編は、竹富町史の中核をなす本編で第二巻竹富島編・第三巻小浜編・第四巻黒島編・第五巻新城島編・第六巻鳩間島編・第七巻波照間島編・第八巻西表島編の七巻仕立てを計画しています。初刊は平成十九年度発刊の竹富島編から始まり、その後、順次刊行していく予定です。これまでに各巻単位に専門部会を発足させ、現在、部会を中心に資料収集・調査などを行っています。

編集委員会では版型B5版、横書き二段組、一ページ一六〇〇文字とする編集構成を決め、執筆要項を提示し、一部修正して承認されました。

④町史第十一巻資料編「新聞集成Ⅶ」は、一九六四年（昭和三九）八月から一九六六年（同四一）十二月までに八重山で発行された『八重山タイムス』『八重山毎日新聞』『八重山朝日新聞』を資料として用い、編集・発刊するものです。発刊は今後決めるとしました。

町史編集委員会の翌二十二日は、黒島の遺跡等を訪ねる史跡巡見を行いました。

南風見入植祝賀会

《写真にみるわが町》26

新城島民の南風見移住

西表島と黒島の中間に浮かぶ新城島。上地・下地の両島からなり、古くから〝ばなり〟の愛称で呼ばれている。〝ばなり〟とは離れを意味し、二つの島が離れていることから、そのように呼ばれてきた、といわれる。

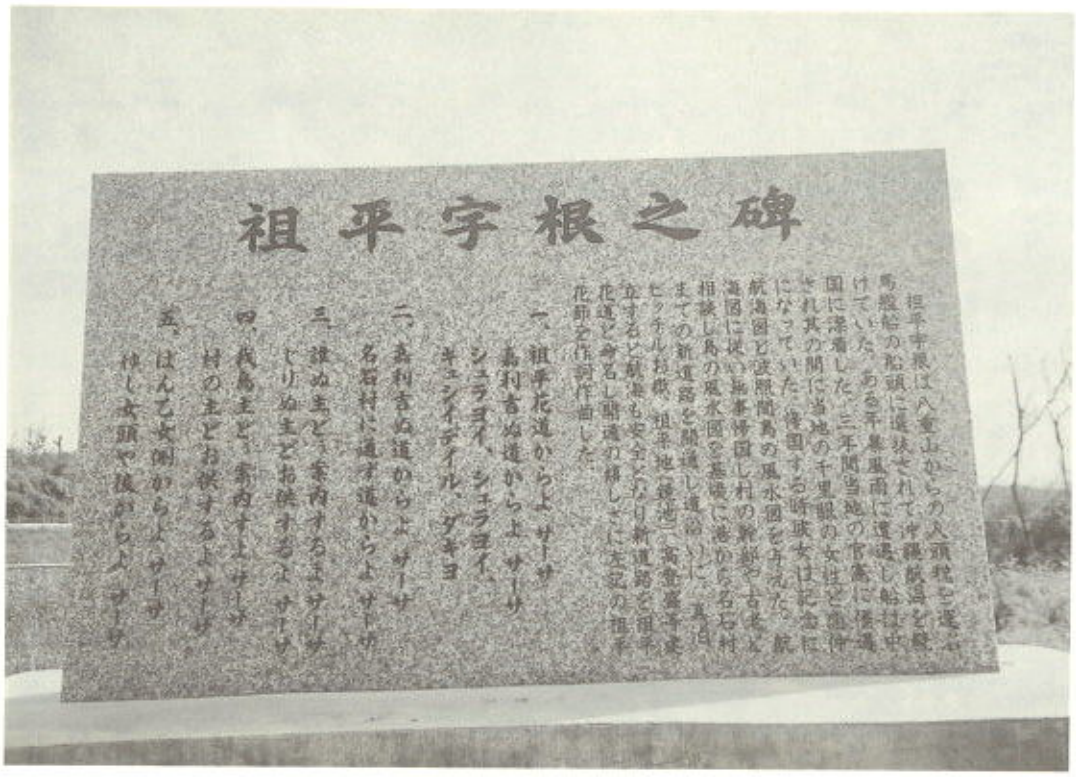
しかし、『宮古八重山両島絵図帳』(一六四七年)には、上離・下離とあり、黒島村の内村として記述されている。そのため、〝ばなり〟は、ただ単に二島が離れているからではなく、黒島から離れているため、付されといわれる見方が有力である。

両島とも低平な隆起珊瑚礁からなり、琉球王国時代にはザン(ジュゴン)を王府に租税として献納した島として知られる。ばなり焼きも有名である。

沖縄では戦前、県振興五カ年計画があった。一九四一年(昭和一六)、この計画に基づく県営南風見開墾事業によって多くの人たちが西表島東部に移住した。新天地に大いなる夢を抱き、希望に燃えて移り住んだのである。写真は当時、上地島から南風見地区へ入植したことを記念して催した祝賀会の模様である。

しかし、一九四一年(昭和一六)は太平洋戦争が勃発した年で、日時を重ねるごとに戦域は拡大し、一九四四年(同一九)には米軍機による空襲、マラリア罹患によって多くの死者が出た。そして敗戦。戦後は米国の直接統治下になり、県振興五カ年計画も中止され、多くの人たちは生まれ島に戻った。だが、戦後、再び東部へ移住する人たちが出てきた。そして、大原集落を築き上げた。

それに反比例して新城島の人口は激減した。下地島は一九六三年(同三八)に無人島に。その後、牧場が整備された。上地島には現在、十人が住んでいる。小中学校もあったが、廃校になった。



《記念碑を訪ねて》6

祖平宇根之碑

波照間島に建つ石碑である。建立場所は、港から名石集落に向かう祖平花道の道路沿い。祖平宇根の子孫にあたる前盛弘吉さん（那覇市楚辺在住）が計画し建立。二〇〇五年（平成一七）十月十四日、関係者が集い、除幕式と祝賀会が挙行された。

祖平宇根は琉球王国時代の島の人物といわれるが、生没不明。人頭税を運ぶマーラン船の船頭に抜擢されたが、沖縄本島への航海中に暴風で遭難し中国に漂着。そこで恋仲になった千里眼の女性から沖縄本島までの航海図と風水図をもらい帰国した。

彼は風水図に基づき、港から名石集落までの道を開通させるとともに、遠見台のコート盛を設置した。道路は、祖平花道で親しまれており、宇根が作詞したといわれる、開通の喜び歌った「祖平花節」は島の祭りで歌い踊られている。

石碑は高さ約八十㌢、幅一・三㍍の黒御影石。大書で「祖平宇根之碑」と刻印されている。その下に、『祖平宇根は、八重山からの人頭税を運ぶ馬艦船の船頭に選抜されて沖縄航海を続けていた。ある年暴風雨に遭遇し船は中国に漂着した。三年間当地の官憲に優遇され其の間に当地の千里眼の女性と恋仲になっていた（以下省略）…』と宇根の功績が刻まれている。

さらに、「一、祖平花道からよ　サーサ　嘉利吉ぬ道からよ　サーサ　シュラヨイ　シュラヨイ　キュシイデイル　ダキヨ」と歌う、「祖平花節」の歌詞が五番まで彫り込まれている。

〈聖地めぐり〉24

清明御嶽

竹富島にある御嶽。竹富小中学校の西方に隣接して建ち、さらに西側には道路をはさんで仲筋御嶽がある。竹富では玻座間、仲筋、幸本、久間原、波利若の六嶽を六山（むーやま）と言い、これに国仲、清明の二嶽を加えて八山（やーやま）、さらに西塘御嶽を入れて九山となる。特徴的なことは、八山のうち清明御嶽だけが島の創世神を祀り、外来の神を勧請していないこと。つまり、祭神が島造りにかかわる神であること。残る七山は、それぞれ沖縄本島、久米島、屋久島、徳之島からの神を奉遷し、信仰の対象としている。

島の神々のなかで最高神の由来を物語る次のような伝説が古くから語り継がれている。「昔、天加那志大明神より人間の住む島を造って来い、と仰せつけられた清明加那志と、山を築けと仰せつけられた大本様の二神が天から降りて来られた。清明様は広い海のなかにあった小さい岩に降りられた。その岩はアガリ・パイザーシの岩といわれ、島の中央部にある。その岩を中心に付近の石や砂利、砂土を盛り上げて造られたのが竹富島である」と。さらに、「大本様は大本山を築き、その山の上に住み、清明様は竹富島を造って島の元に住んだ。その後、大本様からの連絡でせっかく島を造るのにそんな島を造っては困る。私と協力してもっと大きな島を造ることにしよう、とのことで大石垣島、すなわち石垣島が造られた。それから次々と島が造られ、合わせて八つの島が造られた。それで、これを八重山島と呼ぶようになった」（上勢頭亨著『竹富島誌』）ということである。

伝承によると、島造りの神である清明加那志と、山造りの神であるオモト・ホーラステラスヌ神の二神を祀ってあるのが清明御嶽である。島の人たちは「島の元御嶽」と呼ぶ。別名「前ぬ御嶽」ともいわれ、親しまれている。伝承のなかの大本山は於茂登岳のことで、県内最高峰のこの山は、八重山では神の山といわれ、群島の多くの御嶽と関係をもつ。また、アガリ・パイザーシは小御嶽で、島育ての神が祭神である。

六山とは異なり、祭祀組織もなく島民が氏子。神司、カマンガーもおらずトゥニムトゥもいない。村御嶽として公民館が管理運営している。島の元御嶽であることから、祭祀行事は、まず、清明御嶽の神を招き報告することが慣例。また、天降りの神を祀ることから、雨乞い行事の時には、中心的な御嶽となる。四月大祭、西塘大祭、結願祭、九月大祭が主要な祭祀。六山の神司が夜籠もりなどして島の繁栄、島民の無病息災、健康祈願を行う。

〈史料紹介〉

『官報』掲載八重山関係資料②

今号から三浦守治医学博士を中心にした研究グループが一八九五年（明治二八）にまとめた八重山群島風土病研究調査報告書を紹介する。風土病調査は、一八九四年（同二七）八月十一日から九月二十五日までの期間、各村での住民検診によって行われたもので、当時の人々が抱えていた病気の実態が把握できる。調査結果は病気の村ごと及び年齢ごとの集計、さらに個人の病名を記すなど詳細にわたるが、分量が膨大であるため、その主だったものを紹介する。

今号は石垣島の椎名原、名蔵、崎枝、桴海、野底、伊原間、平久保、安良、桃里、盛山、白保、宮良、大浜、真栄里、平得、四ケ村（登野城・大川・石垣・新川）、西表島の崎山、鹿川、網取、船浮、成屋、祖納、干立、浦内、上原、高那、野原、古見、仲間、南風見、それに竹富島、小浜島、黒島、波照間島、鳩間島、新城島、与那国島の年齢単位の患者数を記載する。さらに、個人の病名も記すが、プライバシーにかかわることであるため姓名の一字を取って記述するなど、配慮を加えている。

八重山群島風土病研究調査　①

昨年七月中沖縄県八重山群島ニ出張風土病研究ニ従事シタル医科大学博士三浦守治、医科大学助手医学士三角恂ノ提出シタル報告ハ左ノ如シ（文部省）

明治二十七年七月中小官等文部大臣ノ命ニ依リ八重山群島ニ赴キテ所謂風土病研究ニ従事シ同年十月十五日帰京、其後研究材料調査ヲ営ミ居リシ処今回同調査略々完結セリ依テ右報告書ヲ呈ス

明治二十八三月十八日

医科大学教授医学博士　三浦　守治
医科大学助手医学士　三角　恂

文部大臣侯爵西園寺公望殿

八重山群島風土病研究調査報告

医科大学教授医学博士三浦　守治
医科大学助手医学士三角　恂
沖縄県雇医員川添　正道
沖縄県雇医員我如古楽一郎

第一　風土病患者ノ年齢別及村別表附人口表

表中ノ患者ハ吾等ヵ明治二十七年八月十一日ヨリ九月二十五日マテニ八重山群島ノ諸村落ニ於テ診察シタルモノナリ但シ内地人ハ此中ニ存ラス

（甲一）

風土病患者表　石垣島

年齢	村名	椎名原	名蔵	崎枝	川平	桴海	野底	伊原間	平久保	安良	桃里	盛山	白保	宮良	大浜	真栄里	平得	四ケ村	合計
一乃至五		十五	〇	二	五	八	〇	〇	三	一	二	一	〇	二	一	〇	一	〇	四一
六乃至十		七	二	〇	二六	二	二	一	五	四	三	二	〇	一	一	一	〇	一	五八
十一乃至十五		九	一	三	一七	一	〇	一	五	一	三	〇	〇	〇	一	二	二	三	四九
十六乃至二十		二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	一	一	一	二	一	二	一	二一
二十一乃至二十五		一	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	一	〇	〇	二	一	二	〇	五	一〇	一八
二十六乃至三十		七	〇	〇	〇	一	〇	〇	一	〇	〇	〇	一	二	〇	一	六	五	二七
三十一乃至四十		九	〇	〇	〇	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	二	一	〇	八	八	二七
四十一乃至五十		七	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	一	一	一	四	一二
五十一乃至七十		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三	〇	〇	〇	〇	三
不明者		〇	〇	〇	〇	〇	一	六	〇	一	〇	〇	二	〇	〇	〇	〇	一	一一
総計		五七	三	五	四八	一五	三	八	一五	八	八	四	八	一二	九	六	二五	三三	二六七

（甲二）

風土病患者表　西表島

年齢	村名	崎山	鹿川	網取	船浮	成屋	祖納	干立	浦内	上原	高那	野原	古見	仲間	南風見	合計
一乃至五		四	四	一〇	四	一	二六	三	四	四	二	〇	一三	一	三	七九
六乃至十		六	二	四	一	一	四〇	一	六	五	五	一	一二	〇	二	八六
十一乃至十五		一	一	〇	〇	一	二一	二	一	三	三	〇	五	〇	五	四三
十六乃至二十		〇	〇	一	一	〇	二	〇	〇	三	一	一	一	〇	二	一二
二十一乃至二十五		一	一	〇	二	一	二	〇	二	一	〇	二	三	二	〇	一七
二十六乃至三十		〇	一	〇	一	〇	六	一	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	一一
三十一乃至四十		〇	〇	一	四	〇	二	〇	一	一	〇	二	三	二	〇	一六
四十一乃至五十		一	一	三	二	〇	一	二	〇	二	〇	〇	六	一	一	二〇
五十一乃至七十		一	二	一	二	一	一	〇	〇	一	〇	〇	二	一	四	一六
総計		一四	一二	二〇	一七	五	一〇一	九	一五	二一	一一	六	四五	七	一七	三〇〇

（甲三）

風土病患者表　与那国島、小浜島

年齢	村名			
	与那国	小浜	合計
一乃至五	四	四	八
六乃至十	五	一〇	一五
十一乃至十五	四	一〇	一四
十六乃至二十	四	九	一三
二十一乃至二十五	一	二	三
二十六乃至三十	一	一	二
三十一乃至四十	二	四	六
四十一乃至五十	六	二	八
五十一乃至七十	二	三	五
総計	二九	四五	七四

（甲四）

風土病患者表　鳩間島、新城島、黒島、竹富島

年齢	村名				
	鳩間	新城	黒島	竹富	合計
一乃至五	三	〇	〇	〇	三
六乃至十	二	〇	〇	〇	二
十一乃至十五	五	二	〇	〇	七
十六乃至二十	三	四	〇	七	一四
二十一乃至二十五	一	三	五	七	一六
二十六乃至三十	一	五	一	三	一〇
三十一乃至四十	四	一	三	三	一一
四十一乃至五十	三	一	一	〇	五
五十一乃至七十	〇	〇	〇	〇	〇
総計	二二	一六	一〇	二〇	六八

（乙）

患者表　石垣及其他ノ諸島

村名	患者姓名	年齢	病症
川平村	大オ	十四	黴毒
同	喜賢	三十四位	喘息（麻拉里亜性カ）
平久保	新メ		黴毒
盛山村	出祖	四十八	肋膜炎
同	鳩マ	二十七	癩カ
白保村	世保	二	腸胃加答児
同	東嘉	三	角膜「スタヒローム」
同	島マ	四	疥癬、下痢
同	仲ヌ	四	疥癬
同	新保	五	左側坐骨神経痛状
同	嘉カ	二十四	腹痛
同	世コ	三十	腸胃加答児
同	米樽	三十七	旧風土病
同	新ク	四十	重聴
同	多マ	四十七	胃痛（麻拉里亜性カ）
同	松保	六十二	旧風土病
崎山村	新鶴	十六	慢性湿疹
同	白マ	四十八	膿性結膜炎、三期微毒
船浮村	次樽	三十六	口頭、気管枝加答児
同	嘉美	五十八	挫傷
同	仲真	五十八	外耳炎
同	與佐	七十一	慢性関節「リュウマチス」
成屋村	某マ	三十八	右側肺炎、壊疽
祖納村	古マ	四	腸加答児
同	真孫		蛔蟲カ
同	石ウ	七十二	肺気腫、気管枝加答児
同	大キ	七十二	肺気腫
同	識用	七十三	聾
干立村	大孫	三十四	慢性腎炎
浦内村	大マ	十六	半身萎縮
古見村	赤ウ	三十八	肺結核
南風見村	慶ヲ	三十七	結膜炎
同	久保	四十六	黴毒カ
与那国	入石	一	黴毒
同	石満	一	腸加答児
同	島マ	二	両眼角膜膿溷濁症
同	平蒲	三	腸加答児
同	真亀	四	痴疾

同	新満	九	気管枝加答児
同	入ナ	十四	疥疹
同	亀ナ	十七	腰痛
同	前松	十八	左側膝関節粘液嚢腫
同	崎於	二十一	風土病カ
同	中ク	二十七	黴毒
同	池義		胃痛（麻拉里亜性カ）
同	崎宇		右側陰嚢陰象皮病
同	美速		癢疹
同	阿亀		風土病カ、■、湿疹
同	泊祖		肝臓黴毒
同	浜久		風土病カ、腸加答児
同	福マ	二十九	腸加答児
同	真樽	三十四	黴毒
同	波兼	四十五	胃痛（麻拉里亜性カ）
同	松満	四十六	肝臓黴毒
同	波マ	四十七	肺気腫、気管枝加答児
鳩間島	大石	一	黴毒
小浜島	成イ	二	腰椎「カリエス」、溜注
同	與ヒ	四	左側ノ耳後ニ於ケル「フレグモーネ」
同	與ナ	三十	右側肘関節炎

同	伊高	四十	胃痛（麻拉里亜性カ）、肺気腫
同	新ヒ	四十五	結膜炎
新城島	登保	一	腸加答児
同	本小	二	黴毒
同	仲保	二	風土病カ
同	島石	三	「ヘルニア」
同	新加	九	腸加答児
同	上阿	十二	結膜炎
同	新阿	二十四	気管枝炎
同	花真	三十三	聾
同	仲蒲	三十四	胃痛（麻拉里亜性カ）
黒島	国嘉	二	黴毒、右側角膜「ロイコーマ」
	多真	二	急性腸加答児
同	東キ	四	■
同	保多	四	直腸加答児
同	前與	八	「ヘルペス」、「イリス」
同	石ク	六	腹水（其母ハ黴毒性ナリ）
同	南ウ	十六	胃痛（麻拉里亜性カ）
同	大茂	二十一	癩
同	船赤	二十一	聾

同	大マ	二十二	慢性結膜炎
同	屋ウ	二十二	盲（両目）、黴毒
同	友サ	二十三	腎炎
同	仲蒲	三十四	直腸狭牢（黴毒力）
同	東真	四十	慢性結膜炎
同	上飛	四十九	脳充血症
同	肆真	五十五	左坐骨神経痛（麻拉里亜性力）
同	高武	五十六	両側橈骨神経麻痺
同	本赤	六十二	黴毒
同	仲良	六十六	風土病力
同	比二	七十五	慢性結膜炎
竹富島	有力	二	直腸加答児（赤痢状）
同	浦鎌		角膜雲翳
合計		五十二人	

（附記）

（甲）人口表　石垣島（二十六年末ノ調査ニ係ルモノ）

年齢	村名						
	椎名原	名蔵	崎枝	川平	桴海	野底	
一乃至五	二二	〇	一	三五	九	〇	
六乃至十	一二	二	〇	三八	六	三	
十一乃至十五	一三	二	二	三七	七	四	
十六乃至二十	一〇	一	一	三二	六	三	
二十一乃至二十五	一四	二	三	二三	三	四	
二十六乃至三十	二五	一	四	二一	五	三	
三十一乃至四十	三八	四	二	三二	一一	一〇	
四十一乃至五十	一四	二	五	二二	八	二	
五十一乃至七十	五	二	一	五八	七	五	
七十以上	二	一	〇	一三	一	一	
総計	一五五	一七	一九	三一一	六三	三五	

年齢	村名					
	伊原間	平久保安良	桃里	盛山	白保	
一乃至五	三	五	三	二	六八	
六乃至十	三	一〇	二	三	六五	
十一乃至十五	八	五	五	〇	五九	
十六乃至二十	七	二	三	三	四二	
二十一乃至二十五	四	四	〇	六	四四	
二十六乃至三十	六	七	五	六	三八	
三十一乃至四十	三	一三	三	八	七七	
四十一乃至五十	一〇	八	一	五	四四	
五十一乃至七十	七	七	一	七	五六	
七十以上	一	〇	〇	一	一八	
総計	五二	六一	二五	四〇	五一一	

年齢	村名					
	宮良	大浜	真栄里	平得	四ケ村	合計
一乃至五	五六	九一	二六	六八	五二四	九一三
六乃至十	七二	一〇一	三二	五八	六三八	一〇四四
十一乃至十五	五五	九九	二八	八〇	六三八	一〇四二
十六乃至二十	四四	八〇	三一	七〇	五四九	八七四
二十一乃至二十五	四五	七八	一三	五四	五三五	八三二
二十六乃至三十	三三	五七	一〇	五四	四八三	七五八
三十一乃至四十	六二	九二	二七	八四	七九一	一二五七
四十一乃至五十	四三	六三	二二	四三	四九四	七八八
五十一乃至七十	六三	七二	二九	九六	七七二	一一八八
七十以上	二六	二六	一〇	二七	二二九	三五六
総計	四九九	七五九	二一八	六三四	五六三	九〇五二

(乙)人口表　西表島(二十六年末ノ調査ニ係ルモノ)

年齢	村名			
	山川崎鹿網取	浮屋納立船成祖干	内原浦上	
一乃至五	二一	五一	九	
六乃至十	一八	五八	一一	
十一乃至十五	二四	五六	一三	
十六乃至二十	二二	五七	一二	
二十一乃至二十五	一九	四四	一二	
二十六乃至三十	一七	四一	一四	
三十一乃至四十	二一	六七	一二	
四十一乃至五十	二二	七三	一六	
五十一乃至七十	一七	七七	一五	
七十以上	一	一四	二	
総計	一八二	五三八	一一六	

年齢	村名					
	高那野原	古見	仲間	南風見	合計	
一乃至五	二	一二	〇	四	九九	
六乃至十	五	一四	〇	三	一〇九	
十一乃至十五	三	一二	〇	六	一一四	
十六乃至二十	〇	一六	〇	二	一〇九	
二十一乃至二十五	三	一八	一	二	九九	
二十六乃至三十	二	一〇	〇	〇	八四	
三十一乃至四十	七	一六	三	五	一三一	
四十一乃至五十	八	二五	一	三	一四八	
五十一乃至七十	七	一七	四	五	一四二	
七十以上	二	一	〇	一	二一	
総計	三九	一四一	九	三一	一、〇五六	

（丙）人口表　与那国島、小浜島（二十六年末ノ調査ニ係ルモノ）

年齢	村名			
	与那国	小浜	合計
一乃至五	二五二	三〇	二八二
六乃至十	三一二	三三	三四五
十一乃至十五	二四二	二五	二六七
十六乃至二十	二八一	四〇	三二一
二十一乃至二十五	一九二	四六	二三八
二十六乃至三十	一五九	三四	一九三
三十一乃至四十	二六三	五〇	三一三
四十一乃至五十	二一八	五五	二七三
五十一乃至七十	二〇四	六八	二七二
七十以上	二二	一八	四〇
総計	二、一五四	三九九	二、五四四

（丁）人口表　鳩間島、新城島、黒島、竹富島（二十六年末ノ調査ニ係ルモノ）

年齢	村名				
	鳩間	新城	黒島	竹富	合計
一乃至五	二〇	三二	六二	一一五	二二九
六乃至十	二一	二九	六九	一二三	二四二
十一乃至十五	二一	二八	七四	一一四	二三七
十六乃至二十	一七	二一	四九	九四	一八一
二十一乃至二十五	一九	二二	五二	八三	一七六
二十六乃至三十	一二	二〇	四一	八六	一五九
三十一乃至四十	一九	三〇	九五	一二一	一六五
四十一乃至五十	一七	一六	六〇	九二	一八五
五十一乃至七十	一五	二八	七〇	一二五	二三八
七十以上	五	一三	二六	四一	八五
総計	一六六	二三九	五九八	九九四	一、九九七

収蔵図書紹介

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。あわせてお礼申しあげます。

受贈図書名	寄贈者御芳名
吉川安一	ふるさと　ふるさと
沖縄県立図書館八重山分館	とうもーる　No85
沖縄国際大学南島文化研究所	石垣島調査報告書（2）
沖縄国際大学南島文化研究所	南島文化26号
岩田書院	地方史情報　063
沖縄県公文書館	沖縄県公文書館年報第6号
沖縄関係学研究会	沖縄関係学研究会論集第8号
仲里村史編集委員会	仲里村史　第五巻　資料編4　新聞集成
仲里村史編集委員会	仲里村史　第六巻　資料編4　民俗
沖縄大学地域研究所	壷屋初等学校日誌（一九四六年）
沖縄県平和祈念資料館	寄贈・寄託品展―語りかける歴史の証言者たち
青森県十和田市役所	駒の里―十和田市市制施行50周年記念
阿佐伊孫良	星砂の島　第5号
阿佐伊孫良	星砂の島　第7号
阿佐伊孫良	星砂の島　第8号
三木健	写真集　波照間島―祭祀の空間
前盛弘吉	椰子の実―我が半生記
沖縄県立図書館八重山分館	とうもーる　No86号
鎌倉柳田学舎	改訂版　柳田国男の鎌倉断章
神奈川大学	民具マンスリー　第37号
岩田書院	地方史情報　064
沖縄県立図書館八重山分館	とうもーる　No87号
沖縄県教育委員会	第7回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集
岩田書院	地方史情報　065
浦添市教育委員会	琉球王国評定所文書　総索引
斜里町長　午来昌	斜里町史　第二巻

業務日誌

◆二〇〇五年（平成一七）

三月一九日
・八重山地域史協議会平成十六年度研修会―伊原間村の史跡巡見を実施

三月三〇日
・町史第二巻竹富島編第二回専門部会、竹富島高齢者コミュニティセンターで開催。

四月一日
・古堅廉太郎町史編集室長、定期人事異動に伴い水道課長に異動。玉代勢泰寛建設課長、町史編集室長に着任。
・町史販売委託契約を山田書店など、八重山、沖縄本島の十一書店と契約締結。

四月一三日
・『竹富町史』第十巻資料編「近代3―新城村頭の日誌」編集に着手

四月一四日
・平成十六年八重山郷土紙（八重山毎日新聞・八重山日報）原寸大製本、（有）沖縄マイクロセンターより納本。

四月一九日
・「竹富町史だより」第二十七号の編集に着手

四月二二日
・町史第八巻西表島編第二回学習会、祖納公民館で開催。専門委員、執筆者予定者など十名参加。

四月二五日
・新城島の史跡調査。ジュゴンにまつわる七門御嶽などを調査。通事係長出張。

四月二八日
・八重山地域史協議会二〇〇五年度総会。〇六年度事業などを決める。

五月二五日
・町史第十巻資料編「近代4―官報にみる八重山」パソコンへの文字入力再施行。

五月三〇日
・町史第十巻資料編「近代1―竹富島喜宝院蒐集館文書」、グローバル企画印刷株式会社より納本。

六月三日
・町史第八巻西表島編第三回学習会、祖納公民館で開催。専門委員、執筆者予定者など七名参加。

六月一七日
・町史第十巻資料編「近代3―新城村頭の日誌」第一回小委員会開催。凡例、解題、翻刻文、意訳文、語注などの編集構成および委員の役割分担、今後の編集日程について審議。

七月二日
・町史第三巻小浜島編第三回専門部会、小浜公民館で開催。島の有識者に小浜島編の内容説明を行うとともに、情報交換会を開く。

七月八日

・町史第八巻西表島編第四回学習会、祖納公民館で開催。専門委員、執筆者予定者など十名参加。
・沖縄県地域史協議会二〇〇六年第一回研修会、読谷村で開催。玉代勢室長出張、出席。

八月九日
・町史第八巻西表島編第五回学習会、干立公民館で開催。専門委員執筆者予定者など十一名参加

九月九日
・町史第八巻第六回学習会、西表小中学校図書館で開催。専門委員、執筆者予定者など六名参加。

九月一六日
・竹富町史だより第27号印刷製本契約、㈲八島印刷と締結。

一〇月七日
・竹富町史第十巻資料編「近代3－新城村頭の日誌」印刷製本指名競争入札。六社参加。落札業者がおらず、予定価格にもっとも近い価格を設定した丸正印刷株式会社と協議し、同社と印刷製本の随意契約を締結。

一〇月一一日
・町史第八巻第七回学習会、西表小中学校図書館で開催。専門委員、執筆者予定者など十一名参加。

一一月五日
・ホテル日航八重山で開催された、やいまぴとぅ大会に「竹富町史」を展示販売。

一一月一〇日
・沖縄県地域史協議会第二回研修会（宿泊）、名護市屋我地島の沖縄愛楽園で開催。一一日まで。通事係長出張参加。

一二月二日
・町史第八巻西表島編第八回学習会、西表小中学校図書館で開催。専門委員、執筆者予定者など九名参加。

一二月二六日
・竹富町史第十巻資料編「近代3－新城村頭の日誌」第二回小委員会、琉球大学附属図書館で開催。

◆二〇〇六年（平成一八）

一月二〇日
・竹富町史第十巻資料編「近代3－新城村頭の日誌」第三回小委員会、竹教委・農業委・町史編集室合同会議室で開催。

一月二一日
・第二十一回町史編集委員会、竹教委・農業委・町史編集室合同会議室で開催。平成十八年度事業計画（第十巻資料編「近代4－官報にみる八重山」発刊）、「島じま編」など今後の発刊計画について審議。委員会終了後、「近代1－竹富島喜宝院蒐集館文書」出版祝賀会開催。

一月二二日
・黒島の史跡巡見。

一月二三日
・中野公民館長・津嘉山彦氏の依頼を請け、同氏らとともに戦後の上原炭坑の調査および写真撮影。通事係長、日帰り出張。

二月一日
・松本京子氏（中京大学学生）、黒島の畜産等の調査卒論報告のため来室。
二月六日
・黒島の船道賢範氏、来室。町史第十巻「近代3－新城村頭の日誌」所収の宮良當整日誌に掲載されている、黒島における明治三十年代の人物、居住地の確認調査依頼。
二月一二日
・町史第七巻波照間島編第二回専門部会、波照間公民館で開催。収録すべき総項目を再検討。閉会後、島の史跡を巡見。
二月一四日
・八重山毎日新聞の松田良孝記者、竹富町関係者の戦後外地引揚者調査のため来室。
二月二〇日
・増田昭子氏（立教大学非常勤講師）、黒島の食文化調査に向けて資料収集のため来室。
二月二三日
・竹富町史第十巻資料編「近代3－新城村頭の日誌」第四回小委員会、竹教委・農業委・町史編集室合同会議室で開催。翻刻文と原文との照合、難読文字の解読。二四日まで。
二月二八日
・琉球弧を記録する会代表・比嘉豊光氏、戦争体験をシマクトゥバで語る会の開催に向けて協力依頼のため来室。
三月二日
・町史第四巻黒島編第二回専門部会、竹教委・農業委・町史編集室合同会議室で開催。収録すべき総項目について再検討。終了後、会場を移して専門委員と協力員、執筆予定者と黒島編発刊に向けて協議、懇親を深める。
三月八日
・沖縄県埋蔵文化財センターの山本正昭、崎原恒寿両氏、波照間島の遺跡調査に向けての情報収集のため来室。
三月一六日
・羽生修二氏（東海大学教授）、網取村の民家に関する建築資料調査のため来室。
・越智正樹氏（京都大学大学院）、西表島西部のリゾート施設の歴史的調査のため来室。
三月一七日
・町史第五巻新城島編第三回専門部会、竹教委・農業委・町史編集室合同会議室で開催。収録すべき総項目の再検討。一八日午前中まで。
三月二六日
・竹富町史第十巻資料編「近代3－新城村頭の日誌」第五回小委員会、琉球大学附属図書館で開催。翻刻文と原文との照合。
三月二七日
・町史第二巻竹富島編第三回専門部会、竹教委・農業委・町史編集室で開催。編集構成、項目執筆の役割分担など審議。
三月三一日
・町役場機構改革に伴い、町史編集室は総務課に統合され廃室。

竹富町史の刊行物

1，『竹富町史』別巻２　竹富町関係文献目録　　平成２年度　関係機関へ配付

竹富町関係の文献資料の標題、内容、所蔵機関等を各島ごとにまとめた調査研究のための手引き書。日本十進分類法(NDC）に準じて、一般、哲学・宗教、歴史、社会科学（社会科学一般、行財政、教育)、自然科学（自然科学一般、地理・地質、海洋・気象、植物、動物一般、鳥類、医学・衛生)、工学・工業、産業（産業一般、開発・土地問題)、芸術、言語、文学に分類して文献の発行日順に編集、末尾には所蔵機関を明記してある。Ｂ５版ソフトカバー簡易製本　117ページ。

2，『竹富町史』別巻３　写真集　ぱいぬしまじま　平成４年度　　￥2,625

明治時代中後期から現代に至るまでの島々の実相を、各島ごとに村落・自然、産業・交通、教育・文化・スポーツ、暮らし・戦争、祭祀・芸能の各項目に分類して写真で表現した資料集。924枚の写真を用い、各島ごとに、一言で島を知る題名を標題に付け、島の“顔”を呈示する。モノクロ写真を主体に編集しているが、巻頭にはカラー写真を用い、竹富町の“今”をアピールしている。写真から古き良き時代の島々を偲ぶことができる。Ａ４版糸かがり上製本　319ページ。

3，『竹富町史』第十一巻資料編新聞集成Ⅰ　　平成５年度　　￥2,100

明治31年（1898）から大正７（1918）までの間、沖縄本島で発行された新聞の記事を集成した資料集。収録した新聞は、県内で最初に発行された、「琉球新報」(明治26年創刊)、「沖縄毎日新聞」(明治41創刊）の二紙。「明治・大正期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、文化等の記事を古い順に配列して編集した。県紙であるため、八重山関係の記事は少ないが、それでも西表炭坑や八重山の地誌等の記事は特筆に値する。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　684ページ。

4，『竹富町史』第十一巻資料編新聞集成Ⅱ　　平成６年度　　￥2,100

大正６年（1917）７月から昭和８年（1933）12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「先島新聞」(大正６年７月～同15年８月)、「八重山新報」(大正10年２月～昭和８年12月)、「先島朝日新聞」(昭和３年５月～同８年12月)、「八重山民報」(昭和７年１月～同８年12月）の三紙。「大正・昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は村勢、マラリア問題、村の行財政、選挙等が注目され、往時の竹富村を浮き彫りにしている。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　724ページ

5，『竹富町史』第十二巻資料編戦争体験記録　　平成７年度　　￥3,150

アジア太平洋戦争中の町内の世帯別戦災実態調査、全戦没者数、戦争体験記及び沖縄戦、八重山の戦争をまとめた資料集。各島、各集落ごとに詳細な戦災調査を行い、町内における戦争の実態を明らかにしている。特筆すべきは戦時中の集落地図を作製するとともに、さらに集落ごとに各家族単位の戦争被害を具に図表にしてあること。この資料集から戦争マラリア等の惨事を浮かび上がらせ、戦争がいかに悲惨だったかが分かる。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　1,190ページ。

6，『竹富町史』第十一巻資料編新聞集成Ⅲ　　平成８年度　　￥2,100

昭和９年（1934）２月から同20年（1945）３月までの間、八重山と沖縄本島で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「八重山新報」(昭和９年２月)、「先島朝日新聞」(昭

和９月１月～同15年８月)、「八重山民報」(昭和９年１月～同11年６月)、「海南時報」(昭和10年８月～同20年３月)、「沖縄日報」(昭和11年11月～同15年10月)、「琉球新報」(昭和13年２月～同15年11月) 六紙。「昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料に盛り込まれた記記事は多岐にわたるが、当時の世相を反映し、戦時色の濃い記事が目立つ。それでも記者の島を訪ねてのルポルタージュ記事は、往時の島の一面を垣間見せる。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　720ページ。

7，『竹富町制施行50周年記念誌』ぱいぬしまじま50　　平成10年度　　￥2,625

昭和23年（1948）の町制施行から平成10年（1998）までの竹富町の50年の足跡を写真、年表等で集成した記念誌。本誌は、島びとの暮らしや学校の様子、祭りなどがモノクロ写真を使用して編集され、その年の人口も掲載し、資料的な価値を持たせるように工夫してある。歴史年表は行政に限らず、婦人会、青年会等の動向も扱い可能な限り詳細に、年別の事項を入れてある。また、姉妹町である北海道の斜里町との親善交流の歩みも盛り込まれている。歴代町長、歴代議会議長、町議議会議員、各課課長の顔写真、職員の集合写真、竹富町振興目票も掲載してある。Ａ４版糸かがり上製本　247ページ。

8，『竹富町史』資料集①　鉄田義司日記　　平成11年度　　￥1,575

和歌山県久度山町出身の陸軍少尉（後に中尉・大尉）鉄田義司が残した戦時中に書き残した個人的な陣中日記。彼は昭和16年（1941)、内離島に司令部を置く船浮要塞に赴任したが、その後所属する大隊が石垣島に移転したため、石垣島に移った。日記には赴任の時から要塞での軍事訓練や、石垣島に移駐後に米軍機から初空襲を受けた時の様子、さらに昭和20年（1945）敗戦後の復員までに至る経過を記す。八重山の戦争を知る同時代資料として価値を有する。Ａ５版ソフトカバー簡易製本　519ページ。

9，『竹富町史』第十一巻資料編新聞集成Ⅳ　　平成12年度　　￥2,100

昭和22年（1947）１月から同30年（1955）12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は、「海南時報」(昭和22年１月～同30年12月)、「八重山タイムス」(昭和22年１月～同30年12月)、「南西新報」(昭和22年９月～同28年10月)、「自由民報」(昭和23年７月～同29年１月)、「南琉日日新聞」(後に「八重山毎日新聞」と改題、昭和25年３月～同30年12月)、「八重山新報」(昭和30年４月～同10月）の六紙。「昭和戦後期①の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、終戦直後の島々の様子を綴っているが、当時の新聞が一種の「政論新聞」だったこともあり、選挙に関する記事には政治色が濃厚に出ている。それでも紙面から島びとの暮らしを窺い知ることができる。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り842ページ。

10，『竹富町史』第十巻資料編近代２　　平成13年度　　￥2,625

南嶋民俗資料館（石垣市字大川）が所蔵する崎原文書「必要書」、琉球大学附属図書館（西原町千原）が所蔵する宮良殿内文書「必要書類集」を集成した近代文書の資料集編。「必要書」は、崎原當貴が残した文書。當貴は明治30年に崎山村頭に任じられている。この文書は一種の備忘録で、日記の形式をとる。中でも「人々ヨリ到来物控」は、贈答品のやりとりがあり、往時の村びとの暮らしぶりが髣髴ながら分かる。「必要書類集」は宮良殿内の直系である宮良當整が残した文書である。標題に「明治二十五年以降」とあるが、明治29年（1896）から同40年（1907）までの間の行政文書となっている。當整は白保村頭、新城村頭、竹富村頭を務めたが、行政文書は八重山島庁との往復文書、農業統計資料が中心である。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り348ペー

ジ。

11, 『竹富町史』第十一巻資料編新聞集成Ⅴ　　平成14年度　　￥2,100

昭和31年（1956）１月から同35年（1960）12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「海南時報」(昭和31年１月～同34年４月)、「八重山タイムス」(昭和31年１月同～35年12月)、「八重山毎日新聞」(昭和31年１月～同35年12月)、「八重山新報」(昭和31年１月～同33年３月）の四紙。「昭和戦後期②の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、多岐にわたるが、西表島開発問題をめぐる様々な調査、早稲田大学八重山学術調査団に関する記事等は歴史の一齣として特筆される。なかでも、町長選挙等を巡る記事は、当時の政治の季節を反映し、激しい紙面づくりを展開している。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　843ページ。

12, 『竹富町史』第十一巻資料編新聞集成Ⅵ　　平成15年度　　￥2,100

昭和36年（1961）１月から同39年７月での間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「八重山タイムス」(昭和36年１月～同39年７月)、「八重山毎日新聞」(昭和36年１月～同39年７月)、「八重山朝日新聞」(昭和37年１月～同39年７月）の三紙。「昭和戦後期③の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。収録された記事は、各新聞社によって特色があるが、総じて西表開発問題、町有地処分問題と新庁舎建設、八重山市町村合併と町役場移転問題、西表島での米軍事演習、大干ばつ、西表島での中学校統合問題、一年に二度の町長選挙等の記事がクローズアップされる。記事の中には現在に結びつくものもある。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　947ページ。

13, 『竹富町史』第十巻資料編近代１　　平成16年度　　￥2,625

竹富島喜宝院蒐集館が所蔵する明治30年代の文書を「近代１」として集成した近代文書の資料編。収録した史料は「村日記－明治37年以降」、「間切島会ニ関スル書類－自明治31年至仝37年・自明治37年至」、「報告綴－明治37年」、「人頭税領収証綴－自明治31年至明治35年」、「契約及金銭物品ニ関スル諸証書－自明治31年至仝36年」の五点。喜宝院蒐集館にはこのほか、数多くの民俗資料等があるが、これらの一部は写真に収め口絵として扱った。史料から人頭税施行末期及び廃止直後の島の様子を知ることができる。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　546ページ。

14, 『竹富町史』第十巻資料編近代３　　平成17年度　　￥2,625

琉球大学附属図書館が所蔵する宮良殿内文書のひとつ、明治30年代初中期の宮良當整日記を「新城村頭の日誌」の副題を付け、「近代３」として集成した近代文書の資料編。宮良當整は明治30年（1897）から明治36年（1903）まで新城村頭を勤めた。収録資料は新城村頭時代に書き残した「明治三十三年日誌宮良記」「自明治三十四年丑年旧正月　至仝十二月　日誌宮良當整」と表題の付された近代文書。文字中心の資料編だが、ビジュアル感覚を少しでも取り入れることを基本に、新城島にかかわる写真を口絵として配した。史料は當整の私的な日誌だが、明治期の新城島の人々の暮らしなどを窺知できる。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り600ページ。

※竹富町史の刊行物は、竹富町内の主だった観光施設および石垣市・那覇市・宜野湾市の委託販売契約店での販売のほか、町役場での直販も承っております。送付希望の場合は、宅配業者にお願いし販売代金のほか、着払い料金が請求されます。詳細については竹富町役場総務課（電話0980－82－6191内線123）までお問い合わせください。

編集後記

◆『竹富町史だより』第28号を発刊しました。本号は、前号と同様に『官報』掲載八重山関係資料を中心に据えて、第十巻資料編「近代3－新城村頭の日誌」の紹介、連載シリーズ「写真にみるわが町」で「新城島民の南風見移住」、「記念碑をたずねて」では、波照間島の「祖平宇根之碑」、「聖地めぐり」では竹富島の「清明御嶽」を取り上げて紹介しました。なかでも、新城島に関する写真資料は、写真が少ないなかで、今回の南風見移住にかかわる写真は、貴重であり、島の歴史の一部を語っています。

◆『官報』は一八八三年(明治一六)に創刊され、現在まで発刊され続けているが、町史編集では、一九四五年(昭和二〇)までのものを「近代4」として取り扱い、編集を行っているところです。本号で紹介したのは一八九五年(明治二八)に発表された「八重山群島風土病研究調査報告書」です。調査結果は詳細かつ膨大な量で、これ一つでも一冊になる史料です。そのため「近代4」では、その分量が多いだけに掲載が叶わず「町史だより」で主なものを紹介する計画です。期待してください。（通事）

平成18年9月30日発行

竹富町史だより

第28号

編集発行　竹富町役場

沖縄県石垣市美崎町１１番地

☎０９８０－８２－６１９１